みちくさ

2015.7.1　No.7

夏休みの忘れられない思い出

私の故郷では，海の日の 7 月 20 日と 21 日に，「土崎港曳山まつり」という各町内から曳山が繰り出す賑やかなお祭りがあります。7 月に入ると，学校の音楽室を借りて夕方に町内の方々がお囃子の練習をしていました。学校から帰る時，笛や太鼓の音色が聞こえて来ると，もうお祭りが待ち遠しくてじっとしていられない子どもでした。

7 月 20 日はちょうど 1 学期の終業式で，午前中で帰宅します。早々と家に帰り，特別にお小遣いをもらって，出店のある場所まですっ飛んでいきました。

昔からある古い町内では，曳山をもっていて，毎年繰り出すのですが，残念ながら実家のある町内は，比較的新しい地区であったため，当時，曳山を出すまでには至っておりませんでした。そんな状況を大人たちが不憫に思ったのかどうか，小学生の時，町内の行事で月遅れの七夕のお祭りをしようということになりました。その中で，山車（だし）をつくって，子どもたちでそれを引っぱり町内を練り歩くという構想が生まれました。

6 年生であった私は，その山車をつくる分担になりました。自分たちで設計図を書いて，土台になるリヤカーに木材等で装飾を施す製作活動をするのです。仲間と相談し，山車の形は「戦車」に決まりました。

ただ，つくるものが決まったからといっても，それは小学生のことですからどこから手をつけたらいいのか皆目検討もつきませんでした。ある役員の方の中学生が，ボランティアで参加してくれました。今思い出してみると，木材の調達も，すべてその中学生がやってくれたのだと思います。勇んで家からかなづちやのこぎりを持ち出してはみたものの，道具の正しい使い方も知らないので，その中学生はさりげなく道具の使い方を教えてくれ，私たちにものをつくるという達成感をもたせてくれました。

だいたい 1 週間くらいかかりました。暑い中，プールにも行かないで，毎日それに没頭するくらいとても刺激的で楽しい思い出になりました。もちろん自分たちでつくった山車を引っぱるときの爽快感は格別でした。

子どもたちにお祭りをと考えてくれた町内の方々，ボランティアで製作活動の指導を請け負ってくれた中学生。いろいろな方々のおかげで，6 年生の夏休みは，生涯忘れられない思

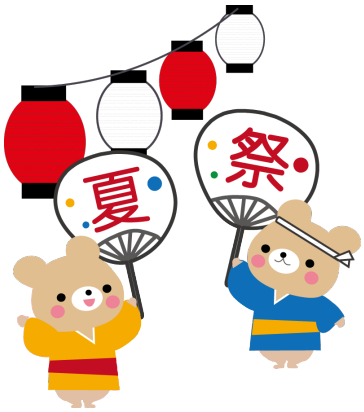
い出になりました。

親たちが，町内の子どもたちを支えていた

　昔は，どこの家でも今のように自家用車はもっていませんでした。（というより，車が走っていることが珍しかった）休みの日に，家族で遊園地へ行って，帰りにレストランでお食事を…という，今だとさほど珍しくもないことが，昔はありません。ですから，親たちは一生懸命子どもたちを喜ばせたいと考え，隣近所の単位でいろいろ催し物を考えていたようです。

　「鍋っ子遠足」という行事がありました。遠足という呼び方はしていますが，これは町内会の行事でした。隣町の小学校まで，大きな鍋や具材を抱えて歩いていく遠足です。親たちと一緒に子どももジャガイモの皮むきをしたり，火おこしの手伝いをしたりします。鍋を火にかけて出来上がるまで，子どもたちは野球をします。いろいろな学年が混ざりあい，汗をいっぱいかきました。疲れた頃に豚汁が出来上がり，みんなで鍋を囲んで昼食です。食べ終わったら，また道具を抱えて歩いて戻ってくるのです。

　これだけの行事でしたが，一年に一回がとても待ち遠しかった記憶が残っています。こういうコミュニティの繋がりが当たり前に存在していました。隣近所，親の顔は知っています。親の方でも，自分の子どもだけではなく，他の家の子どもでも悪いことをしたら本気で叱っていました。



　核家族化し，マイカーブームが来て，レジャーは家族単位に変わってしまいました。隣近所の人と一緒に行動をするということも，月一回の草取りの時だけといった現状です。おそらく仙台でも，昔は私の子ども時代のようなコミュニティはあったはずです。今，おやじの会がお世話して学校にお泊まり会を計画したり，地区でお祭りをするためにお父さんたちが焼きそばや焼き鳥づくりに励んだりと，地域や学校単位で新しいコミュニティをつくっていこうとする動きが多くあります。昔は親たちが一生懸命子どもたちを支えてくれました。そんな記憶が今の大人世代にも懐かしく残っているのではないでしょうか。

**　これから始まる片平地区のお祭りがとっても楽しみな一人です。**